

機関番号：13902

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520223

研究課題名（和文）18 世紀アフリカ系作家と奴隷貿易廃止運動の文学に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Eighteenth-Century African-British Writers and the Literature of Abolition Movement

研究代表者

久野 陽一（KUNO YOICHI）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40242888

研究成果の概要（和文）：当該テーマに従って文献を調査・研究した結果、主に以下の通りの主題に関する論文が発表された。(1) 自意識を持って文学作品を創作することのできた最初の黒人作家としてのフランシス・ウィリアムズ。(2) 最初の黒人作曲家であり、感受性を備えヨーロッパ文化に同化した人物としてのイグネシウス・サンチョのアイデンティティの問題。(3) オラウダ・イクイアーノが自伝の中で使用したイボ語の語彙使用に見られる二重意識。

研究成果の概要（英文）：As a result of this study on eighteenth-century African-British writers, papers on the following topics were published: (1) Francis Williams as one of the first self-conscious black writers; (2) The identity of Ignatius Sancho as the first black composer of music and a man of sensibility who successfully assimilated into European culture; (3) Olaudah Equiano's double consciousness in his uses of Igbo vocabulary.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総 計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学、18 世紀、アフリカ系作家

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、これまで 18 世紀イギリス文学において主流をなす、いわゆる「感受性」の文学を中心に研究を行ってきた。その過程で文化的な背景を研究するにつれて、同時代に奴隷制度が生み出した悲惨な状況を語るアフリカ系の作家が活躍していたことを知るに至った。そして、両者の底辺に広く文化的価値観として、ある種の美的・倫理的・道徳的な感受性が認められることを解明することが本研究の主たる動機となった。

2. 研究の目的

(1) 18 世紀イギリスにおいて英語で著作活動をおこなったアフリカ系作家、Ignatius Sancho, Quobna Ottobah Cugoana, Olaudah Equiano などの作家を再評価すること。

(2) こうしたアフリカ系作家が登場する背景となった 18 世紀から 19 世紀初頭にかけての奴隷貿易廃止運動に関連する著述を発見して評価すること。

3. 研究の方法

本研究は、課題に関連する一次資料及び二次資料を収集し、それらを研究代表者が吟味し、整理・分析することによって進められる。

4. 研究成果

(1) 論文「色をつけないこと—フランス・ウィリアムズ問題」(『外国語研究』第 42 号 [2009 年] pp. 59-69) では、自意識を持って文学作品を創作することのできた最初の黒人作家であるとも言える **Francis Williams** が残した詩と彼の人種に対する態度について、彼の人物像と詩が紹介された奴隷貿易擁護論者として悪名高い **Edward Long** の著作 *The History of Jamaica* との関連をふまえて論じた。**Long** が同書の中で **Williams** を紹介した意図は、黒人に対する白人の優越性を例示することであった。そのために彼は、**Williams** がラテン語で創作したとされるオードを自分で英語に翻訳した上で、古典作品からの借用を事細かに指摘して、この詩のオリジナリティの欠如を示そうとしている。一方、**Long** によって「黒い皮膚で演じている白人」と規定された **Williams** は、そのオードの中で、彼の詩は「皮膚」ではなく「心」から流れ出たものだが、「徳も思慮も肌の色には制限されない」、「何ものも誠実な心に色をつけたりしない」からだと述べている。本論では、このように「心」を基準にすることによって肌の色の相違を無化するという、**Long** の当初の意図を裏切るメッセージがこの詩が含んでいることを論じた。

(2) 論文「イグネシアス・サンチョの静かな生活」(日本ジョンソン協会編『十八世紀イギリス文学研究 [第 4 号] 交渉する文化と言語』開拓社 [2010 年] pp. 47-57) において、**Ignatius Sancho** について、彼が作曲した音楽作品と死後に出版されて広く読まれた書簡集の分析を通じて、黒人としては例外的にロンドンの中心部に食料品店を持つことが許された彼が抱えていた矛盾するアイデンティティの問題と、彼のヨーロッパ文化への同化の諸問題を明らかにした。これまで、**Sancho** が「良き」黒人の模範と考えられるのに貢献したのは、彼の作品そのものではなく、彼の死後出版された書簡集に序文として付された **Joseph Jekyll** による “The Life of Ignatius Sancho” であるが、その情報の信憑性に関して大いに疑問の余地がある。それに対して本論では、**Sancho** 自身が残した作品そのもの、すなわち彼が作曲した音楽作品と手紙を分析することによって、彼のヨーロッパ文化への同化の問題を論じた。(本論文は本研究の主要成果の一つであるので、以下、概略を比較的詳細に報告する)。

まず、サンチョは楽譜を出版した世界で最

初の黒人作曲家である。1767 年から 1779 年までに 4 冊の楽譜集を出版したことが確認されており、そのうち一つには、作曲家として彼の名前が記されている。曲数は全部で 62 曲になる。彼の音楽教育がどのようになされたのか記録は残されていないが、楽譜集で献辞を受けているのはすべてモンタギュー公爵の関係者なので、モンタギュー家で雇われている時代に修得したと考えるのが妥当である。彼が残した音楽は、同時代のヨーロッパのクラシック音楽の伝統に属するが、その時代を代表する作品に匹敵するようなものではない。それでも彼の楽曲は「知識のある有能なアマチュアの手によるもの」であることは分かる。技術的にそれはアマチュアでも十分に演奏可能だと思われるものであった。こうしたことから分かるのは、彼の音楽は、社交の場面や家庭内で演奏されることを想定していたということである。彼が書き残したものが「社交書簡」(familiar letters) であったのと同様に、彼の音楽も「親密」(familiar) な場面において演奏されたことになる。規範から逸脱していない彼の音楽は、非凡さよりも、その凡庸さに特徴があり、「親密な」社交の場におけるある種の秩序、調和(ハーモニー)願望が反映していると言ってもよいだろう。

一方、彼の私的な社交書簡は、ロンドンのウェストミンスターに例外的に自分の商店を構えることが許された黒人男性の日常生活の断片の記録である。そのなかから浮かび上がるのは、良き家庭人であり愛国者でもある **Sancho** の姿である。彼の『書簡集』には、文通相手でもあった **Laurence Sterne** を模倣したような言語実験が随所に見られる。そうして彼は、高度な読み書き能力だけでなく、**Sterne** の洗練されたセンチメンタリズムとリベルトン思想も引き継いでいる。このことによって、彼の手紙は、奴隷貿易廃止運動が高まりを見せた時代に登場する **Olaudah Equiano** などの黒人作家たちとは異なった政治性を示しているのである。彼の手紙から読み取れる日常生活の断片が記録しているのは、波乱に満ちた人生とは正反対の幸福で静かな生活である。そして、彼の政治的姿勢も、私的な社交書簡によって発せられる日常性の中に埋没しがちに見える。

ここで重要なのは、このようなところのない書簡の中から再び現れる、ロンドンの中心に例外的に商店を持つことになった黒人としての自己認識の問題である。彼の人種がただの「良き」家庭人だけであることを許さないのである。彼は実際に、書簡の中で自分が黒人であることについて、ときには冗談めかしながらも何度も言及している。しかしながら、フィラデルフィア在住のあるクエーカー教徒の奴隷制度反対論者からの手紙

への返信に見られるように、Sancho の奴隷貿易に対する態度は、どこかよそよそしい。彼はおそらく自分を元奴隷とは認識していなかったことがうかがえる。

彼の存在をさらに複雑にしているのは、彼はいつでも奴隷制度に関して曖昧な態度をとり続けていたわけではないことである。彼は、友人の若い息子に宛てた手紙で、イングランドの奴隷貿易を激しく批判している。おそらくフィラデルフィア在住の未知の人物に対するのと、友人の息子に対するのとは、親密さの度合いに明らかに大きな相違があるからだろう、彼は後者に対しては、年長者から若者への忠告が盛り込まれている。そして、そこで説いているのは、人種や宗教を超えた「人間性」あるいは「博愛」の重要性であった。

Sancho の書簡において、こうした白人の文通相手と比べて、在英の黒人たちが話題とされることは必ずしも多くはないが、彼らのあいだに何らかのコネクションが確実に存在したことはうかがえる。そうした黒人文通相手として特に重要なのが、当時洒落者かつ放蕩者として社交界に知られた Julius Soubise という若者である。彼に宛てた書簡で Sancho は、友人の息子に対して説いた「人間性」や「博愛」に加えて、「人種」についての意識を際立たせる。すなわち、自分たち黒人にとって、「奴隷」という「悲惨な運命」から逃れるための条件が、イングランドに住み続けることであり、そのためには、放蕩するのではなく、善良でいることが大切であり、それゆえに「正直さ」と「誠実さ」が必要とされる。このような感受性をそなえた「良き」黒人であることが「身を守る」ために必要だ、というメッセージを、Sancho から Soubise に宛てた手紙から読み取ることができる。

Sancho の愛国心の表明は、このような意識を前提として読まれるべきである。彼は、イングランドの政治状況の混乱を嘆く書簡で、自分は「間借り人にすぎない」とうそぶいて見せる。あるいは別の手紙では、イングランドの自由を皮肉ってから、「自分はアフリカ生まれでよかった」と述べている。ここで「アフリカ生まれ」とは、実際に彼がアフリカで出生したということは必ずしも意味しない。Jekyll の伝記記事とは違って、彼自身はおそらく、自分がどこで生まれたのか確たる証拠を持っていたとは考えにくい。彼にとって「アフリカ生まれ」とは、自分が白人ではなく黒人だという認識と同じく、彼の批評的なポジション、つまり批判を有効にする位置づけを確保するためのレトリックだと考えてもよい。

音楽を作曲し、みごとな読み書き能力を持ち、ヨーロッパの洗練された都市文化と文明

に同化しているかに見えるロンドンで商店を営む黒人男性、その背後に善良であるための感受性を備えた「良き」黒人であることが必要とされる、「間借り人に過ぎない」在英黒人としての自己認識が存在するのである。

(3) 論文「スターンと奴隷制度」(『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』第59巻[2010年] pp. 73-78)では、Ignatius Sancho との交流でも知られる作家 Laurence Sterne の奴隷制度に関する言説を分析した。ここで重要なのは、Sterne は Sancho と文通し、また自分の小説作品や説教の中に奴隷の主題を展開することを通じて、奴隷貿易反対という、1760年代にはまだ運動はクエーカー教徒などに限られ、社会的に盛り上がっていたとは言い難い問題について、公的に反対の立場を表明しようとしたことであった。本論では、Sancho の Sterne に宛てた手紙と Sterne の返信、*Tristram Shandy*、*A Sentimental Journey*、さらに説教集 *Sermons of Mr. Yorick* までを論じた。これらの材料を、1780年代以降の奴隷貿易廃止運動における議論とどのように接続できるかが今後の課題である。

(4) 論文「“Olaudah Equiano” の発音表記について—イボ語・英語・二重意識—」(安武知子他編『ことばとコミュニケーションのフォーラム』開拓社[2011年] pp. 235-43)において、Olaudah Equiano のアフリカ・ルーツに関連して、彼のイボ語表記に潜むアフリカ系作家の二重意識を明らかにした。W. E. B. デュボイスに従うと、黒人の「二重意識」とは、「自己をもう一つの世界(白人世界)の啓示を通してのみ見ることを許してくれる世界」における、「自己を他者の目によって見るという感覚、軽蔑と憐びんを楽しみながら傍観者として眺めているもう一つの世界の巻き尺で自己の魂を測っている感覚」である。それは、11歳の頃にアフリカのイボ族の住む村で誘拐されて、奴隷として西インド諸島へ送られた Equiano にとって、幼少の頃の記憶の中にあるイボ語の語彙を、自伝 *The Interesting Narrative* を執筆する時点での第一言語であった英語の記述に挿入するに当たっての表音的なジレンマでもある。

(5) 学会・研究会では以下の口頭発表を行った。西インド諸島の植民地と黒人奴隷を主題とする2つの戯曲 Richard Cumberland, *The West Indian* (1771) と George Colman, *Inkle and Yarico* (1787) を論じた最新の重要論文 Jean Marsden, “Performing the West Indies: Comedy, Feeling, and British Identity” (*Comparative Drama* 42 [2008]: 73-88) について、第30回ステュアート朝研

究会（2008 年 12 月 29 日、専修大学）において、それまでの研究から得られた知見に基づいて批判的に解題した。また、日本英文学会第 81 回大会（2009 年 5 月 30 日、東京大学駒場キャンパス）シンポジウム「イギリス文学とオリエント表象」において、司会兼講師として登壇し、本研究の成果を応用して William Beckford を論じた発表「知恵と悪夢のオリエント」を行った。

(6) 今後の展望としては、18 世紀に英語で著述活動をおこなったアフリカ系の作家の再評価をふまえて、彼らと同時代の感傷主義や人種議しそとの関連を解明し、主流文学の中に位置づけること、また、こうした作家が登場する背景となった 18 世紀から 19 世紀初頭にかけての英語圏の著述を環大西洋という視点から再検討し、文学のみならず文化的・政治的思潮を射程に入れた上で、この時代の特異性と重要性を明らかにする研究を行っていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 久野陽一、スターンと奴隷制度、愛知教育大学研究報告（人文・社会科学編）、査読無、59 巻、2010、73-78
- ② 久野陽一、色をつけないこと—フランス・ウィリアムズ問題、外国語研究、査読無、42 巻、2009、59-67

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① 久野陽一、知恵と悪夢のオリエント、日本英文学会第 81 回大会シンポジウム、2009 年 5 月 30 日、東京大学
- ② 久野陽一、Jean Marsden, “Performing the West Indies” 解題、スチュアート朝研究会、2008 年 12 月 29 日、専修大学

〔図書〕（計 2 件）

- ① 安武知子、他、開拓社、ことばとコミュニケーションのフォーラム、2011、235-243
- ② 日本ジョンソン協会編、開拓社、十八世紀イギリス文学研究 [第 4 号] —交渉する文化と言語、2010、40-57

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久野 陽一（KUNO YOICHI）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40242888

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：